

さるのり
Cafe

花冠

花冠

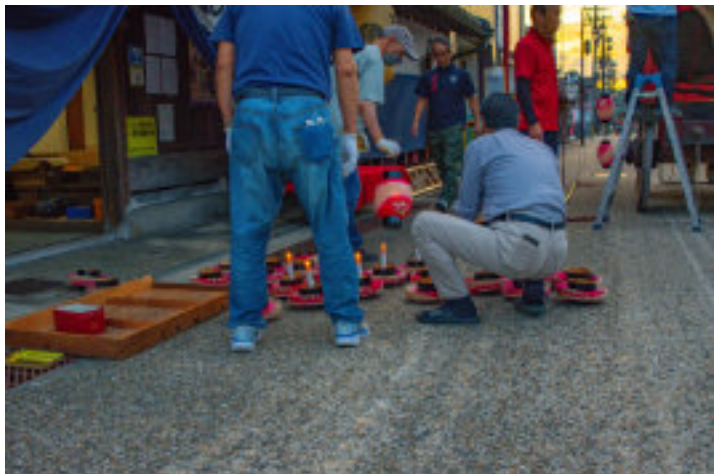
花冠



伊賀上野の天神祭を知ったのは、義妹が教えてくれたからだ。朝から孫の運動会を見学に行き、孫を囲んで昼食をした後、家に戻って別のカメラを持ち出して再び家を飛び出した。

名阪国道に乗り伊賀上野に到着したのは16:00ぐらい。10月なのでまだ日没までには時間がある。臨時駐車場に車を停めて、城下町のメイン通りである本町通りを歩いた。

数カ所でだんじり（楼車）が置かれていて、巡行の出番を待っていた。おそらく町ご



とって行われる。

1日目「宵々山」。本町通、二之町通などのだんじり蔵にて飾付けが行われる。

2日目「足揃えの儀」。三之町筋において午後2時から4時まで鬼行列の練行（雨天中止）。並行して、本町通、二之町通などにおいて13時から16時までだんじり曳行（雨天中止）。さらに18:30頃から「宵山」で、本町通、二之町通などにおいて提灯に点灯し

てだんじり、お囃子演奏（雨天中止）が行われる。

3日目「神幸祭」（本祭りの巡行）午前9時東御旅所出発し、三之町筋にて終了（雨天中止）。

私が鑑賞したのは2日目の「宵山」だ。義妹は鬼行列が見応え充分と教えてくれた。来年の楽しみにとっておう。

さて、現地に到着して、巡行にはまだ時間があつたの

とにだんじりを所有していて、町ごとのスタート地点でスタンバイしているのであろう。

伊賀上野は近くの名張と並んで、藤堂高虎が築いた城下町だ。それより前に領主であった伊予今治の商人文化をこの地に持ち込み、城下町の繁栄をもたらしたといわれている。確かに名張と伊賀上野は互いに良く似た町並みだ。

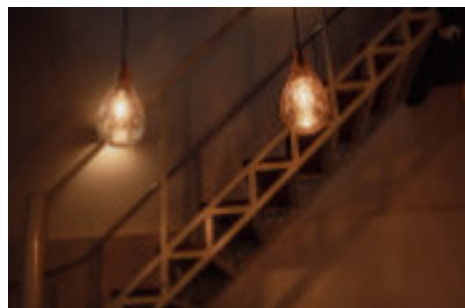
さて、上野天神祭について少し説明しておこう。このお祭りは上野天満神宮（菅原神社）の秋祭りで、3日間にわ

で、カフェ好きの私がぶらりと立ち寄ったのが「CAFE BASHO 1922」。「BASHO」は俳人 松尾芭蕉を表す。なぜなら松尾芭蕉は伊賀上野が生誕の地だからだ。

有形登録文化財でもある歴史を重ねた建物の中に入った。



ダンスホールを思わせるような高い天井に洋風な階段。足を一步踏み入れただけで、レトロな建物であることがわかる。レジに進んで、ドーナ



ツとコーヒーを頼んだ。ドーナツはオーシマドーナツというブランド名がついている。私はホイップドーナツ

ツとホットコーヒーを頼み、一番奥の席について、店内を見渡した。お客は皆お祭りの曳行待ちなのだろう、老若男女の結構な人たちが、それぞれの会話を楽しんでいた。

店を出ると辺りは一層暗くなっていて、いまにもだんじりの提灯に火がつきそうな雰囲気支配していた。やがて囃子が商店街のスピーカーから流れ出し、一層お祭り気分を高揚させた。

私は撮影ポイントを定め、30分ほどウエイティングした。やがて家々から一人二人

と祭の甚平を羽織った「祭人」が出て来て、「我が町」のだんじりに集まってきた。囃子になり、掛け声が聞こえはじめ、だんじりが動いた。

このお祭りはどちらかというと「静」的だ。同じだんじりでも岸和田のそれとは正反対で、囃子のビートが全く違い、京都の祇園祭に近ものがある。上品なお祭りといった感があり、さすがは菅原神社、つまり学問の神様のお祭りだなと思った。

お祭りは近くに寄って見ることができた。つまり至近距



離で撮影ができたのは嬉しかった。高くそびえる提灯の列が、闇夜に映えて綺麗だった。

しかし、この地域でも高齢化が進んでいて、若い人を見かけたのはごく僅かだ。太鼓や囃子を担う子どもも枯渴し

ているといった感じが否めなかった。

ユネスコ無形文化遺産に認定されているこの貴重なお祭

りも、いったいいつまで後世に伝えることができるのだろうか」と憂慮するのだった。

それにしてもこの「静的」なお祭りは、上野の城下町に良く似合う。町にお祭りが溶け込み、お祭りに町が寄り添うような祭事であった。

一通り見学と撮影を終えて、駐車場に戻る途中、上野高校の前を通った。大学時代にこの高校に通っていた友達とはとうの昔に音信不通になったし、名張旧村に住む友達も年賀状のやり取りすらなくなる寸前のような状…。今更ながら、これらの土地のくらしや文化、息遣いを知ると、あの頃の自分が随分幼稚くさく思えた。

今回のお祭りの見学は、旅



と名がつくようなものではないが、それに類する、なんとか異地域、異文化にふれる貴重な機会となった。

城下町には古い文化がいまもなお息づいているが、時間の経過とともに、それらがア

レンジされて新しい文化が形成されている。古い文化とそれを土台にした更新された文化、そのどちらも交錯する伊賀上野は、私にとってとても魅惑的な場所であり続ける。

